

〈2〉 中国人民解放軍に対するウクライナ戦争の 教訓と 2024 年 4 月の組織改編の意義

防衛省 防衛研究所 地域研究部 中国研究室

主任研究官 杉浦 康之

はじめに

2022 年 2 月に始まったウクライナ戦争は 4 年目に入った。欧州における第二次世界大戦以来の本格的な戦争となったウクライナ戦争は各国の軍事ドクトリンや部隊運用に多大な影響を与えているといわれており、その研究成果が幾つか出されている¹。

中国人民解放軍（以下、人民解放軍）もその例外ではなく、ウクライナ戦争から多くの教訓を得ていると指摘され、日本のみならず、米国や台湾などの研究者がそれに関する研究成果を発表している。このうちジョエル・ウズナウ（Joel Wuthnow）の研究は人民解放軍がウクライナ戦争において自身の軍事ドクトリンや作戦構想の有効性を確認したと指摘しており、本稿もこの点に関して同じ結論に至る²。また『中共研究』に掲載された台湾の研究者による論稿は、ウクライナ戦争で注目された作戦領域を広範囲に取り上げたうえで、それらが人民解放軍の台湾

侵攻作戦にどのような影響を与えていくのかを考察している³。日本での研究として八塚の研究は、中国側の研究者の指摘を踏まえて、主に宇宙・サイバー・認知領域におけるウクライナ戦争の人民解放軍への教訓を論じている⁴。

他方、人民解放軍によるウクライナ戦争への包括的な評価を行った公式の報告書は管見する限り公表されていない。ただし、人民解放軍機関紙『解放軍報』掲載のウクライナ戦争を想起させる論説や、人民解放軍の高官によるウクライナ戦争への言及、人民解放軍の研究者によるウクライナ戦争の分析などは確認できる。

本稿は、人民解放軍がウクライナ戦争からどのような教訓を得ているのかとの問題に関して、現在および将来の軍事ドクトリン・作戦構想・軍事力運用方針への影響を検討したうえで、主として宇宙領域・情報領域における変化、特に 2024 年 4 月に行われた人民解放軍の組織改編を分析する⁵。

¹ 日本語では、小泉悠『ウクライナ戦争』（筑摩書房、2022 年）；高橋杉雄編『ウクライナ戦争はなぜ終わらないのかーデジタル時代の総力戦』（文藝春秋、2023 年）；土屋大洋、川口貴久、佐々木孝博、八塚正晃、山本達也『ウクライナから東アジアへー新領域における戦いとその教訓』、KCS Report no. 1（慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート（KGRI）戦略構想センター、2024 年）。英語では、Jeffrey Mankoff, ed., *Lessons and Legacies of the War in Ukraine: Conference Report* (Washington, DC: National Defense University), *Strategic Perspectives*, no. 43 (February 2024)などを参照。

² Joel Wuthnow, “Rightsizing Chinese Military Lessons from Ukraine”, *Strategic Forum* (Washington, DC: National Defense University), no. 311 (September 2022).

³ 「俄乌戦争対共軍の啓示と調整」『中共研究』第 57 巻第 3 期（2023 年 9 月）、87-152 頁。

⁴ 八塚正晃「第 3 章 中国は何を学んでいるか」土屋他『ウクライナから東アジアへー新領域における戦いとその教訓』23-30 頁。

⁵ 本稿で論じるウクライナ戦争の組織改編への影響を論じた先行研究としては以下を参照。Toomas Hanso, “China’s New Information Support Force: Military Lessons from Ukraine”, *The International Centre for Defence and Security (ICDS)*, December 2024.

1. 人民解放軍による軍事ドクトリン・作戦構想・軍事力運用方針の再確認

人民解放軍は、ウクライナ戦争の教訓を踏まえて、これまで進めてきた軍事ドクトリン・作戦構想の正しさを確認したと指摘されている⁶。なぜならば、ウクライナ戦争で注目された宇宙空間の活用、無人兵器の運用、サイバー空間・認知領域での戦いなどは、人民解放軍が軍事ドクトリン・作戦構想としてこれまで重視してきた内容だったからである⁷。

(1) 軍事ドクトリン—情報化局地戦争と智能化戦争

2012年11月の中国共産党第18回全国代表大会で中央軍事委員会主席に選出された習近平は統合作戦能力の強化を重視した。2013年11月の中国共産党第18期第3回中央委員会全体会議で習近平は国防・軍隊改革（以下、軍改革）の実行を発表した。人民解放軍は習近平の指示の下、情報化戦争を念頭においた統合作戦体制の構築を目指し、建国以来、最大かつ最も徹底した改革を行った⁸。

軍改革の理論的支柱となった軍事ドクトリンが「情報化局地戦争」である。習近平体制は2014年頃からそれまでの「情報化条件下の局地戦争」⁹に替わる軍事ドクトリンとして「情報化局地戦争」を提唱した¹⁰。

人民解放軍中国国防大学『戦略学』2020年版は「情報化局地戦争」の特徴として、①戦争は政治・経

済のみならず、国内外の輿論や国際法など社会的要因から様々な制限を受ける、②情報能力に優れた制情報権が制空権、制海権などを奪取する上での前提条件になる、③陸・海・空・宇宙などの有形の戦場に、電磁波領域・サイバー空間・心理認知領域などの無形の戦場が加わることで戦場空間は拡大・多次元化・立体化し、空・宇宙の戦場が融合・一体化して戦略的制高点となる、④「システム体系」¹¹ 対抗を主眼とした「多領域一体化統合作戦」が基本の作戦形式となる、⑤戦争進行過程、打撃目標と手段が正確にコントロールされ、高効率で費用対効果が高く、低リスクかつ低コストの中小規模の精密作戦へ移行する、⑥軍事の智能化の発展が日増しに顕著なる、という6点を指摘する¹²。かかる構想は習近平指導部が独自に考案したのではなく、胡錦濤時代から検討が進められていた概念を踏襲したものであった¹³。

2019年7月の『新時代における中国の国防』（以下、『国防白書』）は、次の戦争形態としての「智能化戦争」に言及した。『国防白書』は「智能化戦争」の登場の背景として、「人工知能（AI）、量子情報〔技術〕、ビッグデータ、クラウドコンピューティング、モノのインターネット（IoT）など先端科学技術の軍事分野における応用」を指摘した¹⁴。

国防大学の研究者は「智能化戦争」を、「IoT 情報システムを基礎として、智能化された武器・装備および関連する作戦方法を使用して、陸・海・空・宇

⁶ Wuthnow, "Rightsizing Chinese Military Lessons from Ukraine", 3-7.

⁷ ウクライナ戦争の軍事的分析については小泉悠『ウクライナ戦争』、高橋杉雄編『ウクライナ戦争はなぜ終わらないのか』などを参照。

⁸ 杉浦康之『中国安全保障レポート2022 統合作戦能力の深化を目指す中国人民解放军』（防衛省防衛研究所、2021年）、6頁。

⁹ 人民解放軍は「情報化条件下の局地戦争」を「情報システムに依拠し、一定の情報化水準の武器装備およびそれに相応する作戦方法を備えた局地戦争であり、工業時代が情報時代に向かう過渡期の戦闘の基本形態である。この発展の趨勢が情報化戦争である」と定義する。軍事科学院編『中国人民解放军軍語（全本）』（以下、『軍語』）軍事科学出版社、2011年、48頁。

¹⁰ M. Taylor Fravel, *Active Defense: China's Military Strategy since 1949* (Princeton: Princeton University Press, 2019), 230-234.

¹¹ 人民解放軍には、システムに関して「系統」と「体系」という二つの用語がある。「系統」は情報支援システム、指揮統制システム、火力打撃システムなど、個別の軍事システムに使われる。「体系」は「系統」の高度の段階であり、多くの「系統」から構成される大系統であり、米軍の使用する「システム・オブ・システムズ（System of systems）」の訳語として使用される。王勇男『体系作戦制勝探要』国防大学出版社、2015年、2-4頁。Jeffrey Engstrom, *Systems Confrontation and System Destruction Warfare: How the Chinese People's Liberation Army Seeks to Wage Modern Warfare* (Santa Monica: RAND Corporation, 2018), 2-5.

日本では「体系」の訳語は定着しておらず、「システム」「体系」などと訳される。しかし「体系」を「システム」と訳してしまうと、個別の軍事システムとの差異が不明となる。一方、「体系」と訳すことは、この概念で重視される指揮（Command）、統制（Control）、通信（Communication）、コンピューター（Computer）、情報（Intelligence）、監視（Surveillance）、偵察（Reconnaissance）というC4ISRの重要性が理解されない。そこで本稿はC4ISRの重要性を意識した際の「体系」を「システム体系」と訳することとする。

¹² 肖天亮主編『戦略学（2020年修正）』国防大学出版社、2020年、182-185頁。

¹³ 杉浦康之『統合作戦能力の深化を目指す中国人民解放军』、20頁。

¹⁴ 中華人民共和國國務院報道弁公室『新時代における中国の国防』（外文出版社、2019年）、7頁

宙・サイバー電磁波および認知領域で進める一体化戦争」と定義する¹⁵。「智能化戦争」の特徴として、①AIやクラウドコントロールなどを活用した人機共同決策（人間と機械による共同の決定）の指揮統制、②無人機を主力とした武器・装備体系の構築と「蜂群（スウォーム）攻撃」の実現、③伝統的安全保障領域と新型安全保障領域、物理的安全保障空間（陸・海・空・宇宙）と非物理的安全保障空間（認知・社会・サイバーなど）の一体化・融合の進展と認知空間での対抗作戦での主導権と支配権の獲得、などが指摘される¹⁶。

人民解放軍は現段階では「智能化戦争」を「情報化局地戦争」に替わる軍事ドクトリンとして設定していない。ウクライナ戦争の勃発後、『解放軍報』では「智能化戦争」への言及が目立つが、「情報化智能化戦争」との表現も登場している¹⁷。

（２）作戦構想—「システム体系作戦」構想と「一体化統合作戦」構想

「情報化局地戦争」で基本的な作戦形式とされているのが「システム体系作戦」構想と「一体化統合作戦」構想である。

「システム体系作戦」は米軍のC4ISRの発展を踏まえて考案された作戦構想であり¹⁸、胡錦濤時代に提唱された「情報システムに基づくシステム体系作戦能力」概念を踏襲・発展させた概念である¹⁹。その主たる特徴は、①戦場状況を同時に感知し、リアルタイムの情報共有を行う、②各軍種を融合し、効率の高い作戦を実施する、③各軍兵種が協調してシンクロし、一つの纏まりとして行動する、④敵を一つの完成された作戦システム体系として捉え、その枢要な箇所を発見・攻撃して敵の全体構造を破壊する、⑤指揮統制で分散と集中を同時に実現する、⑥情報

保障やロジスティクスなどの後方支援活動で各種能力を集約し、正確な保障を実現する、ことにあととされている²⁰。

「システム体系作戦」構想は、次の諸点を重視している。すなわち、①情報主導——制情報権の最重視、②統合制権の獲得——制情報権、制空権、制海権、制宇宙権、制陸権の総合的奪取、③連動行動——情報ネットワークを基礎とし、指揮統制を核心とし、情報伝達を架け橋とした、作戦ユニット・作戦要素・作戦システムの融合による各軍兵種の一体化、④精密かつ正確な統制——総合電子情報システムに依拠し、智能化された精密誘導打撃能力により敵の作戦システム体系の重要目標を攻撃することで得られる、最小コストによる最大効果の実現、⑤システム体系破壊——敵の作戦システム体系の枢要部分（政治指導者、国家および軍の指揮中枢、エネルギー施設、交通網、民心、軍事力）の発見・攻撃、⑥効率的な作戦の実施——精密誘導攻撃・ステルス技術の活用、軍事力と外交などの非軍事能力との総合的運用による非対称優勢の確保、敵の抵抗意志の破碎、⑦先制の確保——リアルタイムで正確な戦場感知能力、効率のよい意思決定能力、先制攻撃能力による最小被害での作戦目的の実現、⑧非対称戦の実施——敵の戦場感知システムの遮断、精密誘導攻撃・斬首作戦・サイバー攻撃による敵指揮システムの麻痺、敵の測位航法能力の脆弱化、⑨リアルタイム且つ主動的な調整——総合的に電子情報システムを活用し、上級から指示された作戦意図と目標に関する一定の協同規則を重視しつつ、戦場の情報・状況に基づいて行う作戦行動、⑩各種謀略活動の遂行——総合的に電子情報システムを活用し、主体的な能動性と情報技術優勢の発揮による有利な情勢の形成、である²¹。

¹⁵ 龐宏亮『21世紀戦争演変与構想 智能化戦争』上海社会科学院出版社、2018年、84頁。

¹⁶ 飯田将史「人民解放軍から見た人工知能の軍事に対するインパクト」『安全保障戦略研究』第1巻第2号（2020年10月）、5-13頁；八塚正晃「人民解放軍の智能化戦争—中国の軍事戦略をめぐる議論—」、『安全保障戦略研究』第1巻第2号（2020年10月）、26-27頁。

¹⁷ 『解放軍報』2023年7月20日、8月22日、8月31日、9月14日。

¹⁸ 王勇男『体系作戦制勝探要』、9-12頁；Jeffrey Engstrom, *Systems Confrontation and System Destruction Warfare*, 10-11.

¹⁹ 「情報システムに基づくシステム体系作戦能力」に関しては、杉浦康之『統合作戦能力の深化を目指す中国人民解放军』、12-13頁。

²⁰ 王勇男『体系作戦制勝探要』、19-24頁。

²¹ 同上、28-66頁。